

令和6年2月8日

能登半島地震と志賀原子力発電所

核兵器廃絶・平和建設国民会議
(略称 KAKKIN)
事務局長 岩附 宏幸

能登半島地震で被災された方に、衷心よりお見舞い申し上げます。また、亡くなられた方に哀悼の意を表します。

先日、朝のテレビのワイドショーがこの地震を取り上げ、その中でコメンテーター氏が、「震度7の地震が起きるような場所に、原子力発電所があるのは問題」として、北陸電力・志賀原子力発電所の危険性を主張していた。確かに志賀原子力発電所（以下、発電所）では地震による被害が出たが、その実態はどうだったのか。電気事業連合会が、HPに「能登半島地震による各原子力発電所への影響について」という特設サイトを設けているので、これを参考に確かめてみたい。

まず発電所は現在運転休止中で、放射能漏れは起きていない。発電所周辺のモニタリングポストの一部が一時的に故障したが、発電所敷地内のモニタリングポストは、地震発生前後を通じ正常に測定しており、異常は確認されていない。

冷却用外部電源の一部を失ったことも大きく報じられた。実際、5回線あるうち2回線は失われたが、3回線は使用可能である。また外部電源をすべて喪失したときに備えて、非常用電源や電源車を備えており、二重、三重の対策が取られている。

また1月1日に3mの津波が来たことから、これを心配する声もあるが、発電所の敷地は標高11mにあり、さらに高さ4mの防潮堤が作られている。海面から15mの余裕があるので、3mの津波では施設への影響はない。

発電所の耐震性に疑問を投げかける声もある。そこでは、強固な岩盤の上に建設されている発電所の揺れ（加速度）と地表面に近い表層地盤に建設される一般建築物の揺れを比較している。しかし、強固な岩盤では地震の揺れが増幅されにくいのが、表層地盤では地震の揺れが大きく増幅されるため、そもそも揺れの数値だけで単純に比較することはできないものである。

どんな施設でも強い地震に見舞われたら、何らかの被害は出る。とはいえ原子力発電所なのだから、被害をゼロにせよ、という意見はある。しかしそれは非現実的で、被害を受けたとしても、重大事故を防ぐ対策・仕組みを備え、リスク低減が図れているかどうかの方が重要だろう。事実、過去の教訓を基に、安全対策を進めてきた志賀原子力発電所はそのことを証明している。そして大規模自然災害が起きるたびに、原子力発電所の安全性をめぐるデマや不安を煽る情報が流される。私たちは福島第一原子力発電所のALPS処理水の海洋放出の際と同様、正確な情報や科学的な説明を理解して、正しい判断をしていきたい。

以上